

一九三一年（昭和六年）、関東軍の独断専行による満州事変が起きたこの年、橋本忠雄は、アメリカ オクラホマ州で産声を上げました。

この年は、東京国際飛行場（羽田空港）が開港し、当時世界最長の清水トンネルが開通した年でもありました。

忠雄が物心ついた頃、太平洋戦争が勃発します。誰もが苦難を強いられた戦時下。時代の荒波に翻弄される中、ハワイ大学で学び、青春時代を歩きました。

終戦後、最も貧しく苦しかった時代を乗り越え、日本は急速に復興と民主化が進みます。高度成長期を迎える中で、忠雄は、力強い足取りで人生を歩みます。

株式会社丸忠を起業し、代表取締役として、社会の舞台で活躍していきました。

「澤田専務と共に、必死になって会社のことを考えていたことを思い出します。あの頃は、夜も朝もなかったのではないのでしょうか」【長男 … 太朗】

その道のりをひも解けば、縁の糸に導かれ、美代子と家庭を築きます。

移りゆく歲月の中で、伸介が誕生しました。子供の笑顔は、何より輝いて感じられたことでしょう。

責任ある仕事をこなしながらも、優しい心で家庭を守ってきました。

活気溢れる生活の中、充実した時間を送りました。

「主人にとって、ハワイは第二の故郷のようなものですので、毎年正月には家族でハワイに行っていました。今年の正月は、体調が万全ではなかったのですが、主治医の高田先生に無理を言っただけでワイキキの夕日を見られました。」

【妻 … 美代子】

四季折々に吹く風は、人の世の喜びと悲しみを包んでいます。今思い出の糸を手繰り寄せ、懐かしい日々を想いを馳せれば、命の尊さ、命の重さ、命の儚さ、そして優しさに彩られた暖かな記憶が蘇ります。忠雄は、家族に見守られて、最期の時を迎えました。

人は皆、多くの人に温かく抱かれ、支えられて生きてきたのです。一人一人の胸の内には、それぞれがたどった人生の軌跡が描かれています。素晴らしい日々を、精一杯生き抜いた人生でした。

「せっかちな人でした。思い立ったが吉日と言いますか、良いと思ったことはすぐに行動に移す性格でした。大人が使うようなパソコンも、本人はすぐに飽きて息子のオモチャになっていたことを、今となっては微笑ましく思い出します」【長女 … 美佐江】

貫き通した信念。

忠雄の尊さは、いつまでも輝き続けることでしょう。決して、色あせることなく。

橋本忠雄 八十五歳

二〇一六年（平成二十八年）二月十二日
永眠